

令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校B) 報告書 亀崎小学校

1 学校の課題

(1) 「困り感」を抱える児童への的確な支援の難しさ

発達的な課題や学力の低さ、家庭背景等により学びに背を向ける児童や授業に参加していても学ぶことの楽しさや意義を感じ取れていない児童、登校渋り、人間関係の問題、授業に対して消極的な児童など困り感を抱えている児童が一定数いる。本校は全学年単学級ということもあり、児童の実態把握や支援を担任一人で抱えがちである。

(2) 情報共有

問題行動の報告・情報の共有・対応の体制はとれているが、授業での支援の情報を共有する場が少なく、校内全体として授業づくりの中で児童のニーズの把握や個の支援への意識を高める必要がありインクルーシブ教育の体制はまだ十分整備されているとはいえない。

2 研究主題

主体的に学びに向かい、自己の学びを深める児童の育成
～すべての児童が学びの楽しさを実感できる国語科の授業づくり～

3 取組内容

(1) すべての児童が学びに向かうための授業づくり

①見通しをもち学習課題に取り組むための工夫

単元の目標を達成するために、児童が取り組みたくなる言語活動を設定し、教師が与える学習課題だけでなく、児童から出た問いをもとに学習課題を設定した。

単元の導入時には、ゴールを明示し、どのように学習を進めていくか全体で確認した。単元計画は教室に常時掲示したり、児童に配付し確認したりできるようにすることで、児童が見通しをもち、学習に向かうことができるようにした。

自分の考えを書く活動においては、表はヒントなし、裏はヒントありのプリントを用意し、児童が自分で書きやすい方を選んで学習することで、配慮の必要な児童だけでなく、全ての児童にとって取り組みやすい手立てとなった。また、リーフレットやブック、図鑑など出来上がったものが成果物として残ったり、単元の前と後でどのような力が付いたかなど児童に振り返らせたりすることで、学ぶことの楽しさや成長したことを実感できるように工夫した。



ゴールの明示



単元計画の確認・掲示 (全体)

8	7	6	5	4	3	2	1	しりしり	うみのかくれんぼ たんけんいかく
ずかんをよみあおう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。	うみのかくれんぼをよもう。
(C)	(C)	(C)	(C)	(C)	(C)	(C)	(C)	(C)	(C)



単元計画の確認 (個人)

②児童の実態に応じた支援

各クラスで2～3名、個に応じた支援を検討する児童を抽出し、特別支援教育コーディネーターと連携して児童の見取りや支援の検討・実践を行った。

今年度は全学年の中で2年生の2名を対象児童と設定し、重点的に実態の見取りや支援のあり方について検討し、校内で情報を共有した。

	実態	支援
A児	<p>①規則正しい生活習慣が定着していない。起きにくく欠席や遅刻が多い。</p> <p>②学習内容のつながりがもてず、何をしているのか分からないことがあるため、活動に消極的になる。</p> <p>③集中力が持続せず、ノートをとったり、学習道具を準備したり、自分から学習に向かうことが難しい。</p> <p>④文章の内容を理解したり、自分の考えを書いたりすることに困難さがある。</p> <p>⑤書字への困難さがある。</p>	<p>①学習前（朝の会）に体を動かす。（ロケット体操、グーパー体操）</p> <p>②授業の導入時には、既習内容の確認をしたり、答えられる問題を意図的に指名したりして、自信をもたせる。</p> <p>③手元に板書を書いたノートを置き、見ながらノートを写すことができるようにする。</p> <p>④自分の考えを書く前に、思いを聞くことで書くことができるようにする。</p> <p>⑤新出漢字の宿題は、漢字練習帳に繰り返し書かず、個別に量を調整した穴埋めのプリントを使う。</p>
B児	<p>①字形が整わず、ノートのマスに当てはめて書くことが難しい。書くことに時間がかかったり、上手く書けなかったりすることで活動に向かえなくなることがある。</p> <p>②自分の思う通りにいかなかったり、できなかったりすると落ち込んで活動に参加できなくなる。</p> <p>③思いがあり全体の場では発表できるが、ペアトークではどのように話していいのかわからないため伝えることが難しい。</p>	<p>①国語科ではノートの代わりに、主にプリントを活用し書字量を調整した。書く欄を吹き出しにすることで、マスのはみ出しを意識せず、自分の思いが書けるようにする。新出漢字の宿題は、漢字練習帳に繰り返し書かず、個別に量を調整した穴埋めのプリントを使う。学校では教師が灰色のペンで書いた字をなぞり書きするようにする。</p> <p>②気持ちを切り替えることができるように、次の活動で活躍できる場やできたと感じることができるような場を増やす。</p> <p>③ペアトークで、心許せる児童が隣になるように席を配慮したり、教師が意図を汲み取り発言を促したりする。</p>

(2) 情報共有

主に担任、特別支援教育コーディネーターが必要と判断した場合や、保護者からの要望があった場合に、ケース会議を開き、児童の学習における困り感の情報を共有したり、支援のあり方について話し合ったりする時間を設けた。話し合った内容や具体的な支援を実践した効果については、全体で共有し、他の学年・児童にも生かしていけるように情報を発信した。

毎月職員のミーティング後にクラス・抽出児童の現状や支援などについてグループで話し合う「インクルタイム」を設け、情報共有やテーマに応じた話し合いを行い、児童の支援のあり方について振り返ったり、別の視点からの支援について考えたりした。校内研究授業を全学年1回行い、抽出児童の実態や個に応じた支援について指導案に明記することで、より個に着目した授業づくりや支援のあり方について全教員で意識を統一した。

4 検証結果

(1) すべての児童が学びに向かうための授業づくり

①見通しをもち学習課題に取り組むための工夫

(児童アンケート)

国語科の授業に意欲をもって、一生懸命に取り組んでいますか。(全校児童の結果)



「国語科の授業に意欲をもって、一生懸命に取り組んでいますか」といったアンケート項目の結果は、肯定的な評価であった。これは児童が見通しをもって学習課題に取り組むための工夫を教員が年間を通じて意識して行ってきたからだと考える。

A児、B児については、読み・書きに困難さがあっても、国語科の学習に意欲が高まったことが分かる。年度当初は、活動内容が分からなかったり、自分の思いを表現することが苦手だったりして、学習に自ら向かうことができない場面も見られたが、だんだんと自分から学習道具を準備したり、考えを発表したりする意欲的な姿が見られるようになってきた。これは、見通しをもたせる支援や書字の困難さへの支援等を行ったことで、単元全体や1時間の授業の流れを大まかにイメージすることができたことや、書いてみようという気持ちをもてたことで、「できた」「分かった」といった経験を積み重ね、自信につながったと考えられる。

②児童の実態に応じた支援

(抽出児童の変容)

児童	実態の変容
A児	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に登校した日は朝から集中して授業に取り組む場面が以前より増えている。 ・年度当初はノートを書くことが難しかった。プリントを使用することで書く内容が明確になったり、書く量がしぼられたりして自ら書くことができるようになってきた。書くことができたという経験を積み重ねることで、ノートを使用した授業でも自分の考えを書いたり、板書を写したりしようとする姿が見られるようになった。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・灰色のペンで書いた下書きをなぞることで、ひらがなを覚えていなくても書くことができ、書くことに抵抗がなくなってきた。意欲的に書く機会が増えたことで、マスから大きくはみ出さず文字を書くことができるようになってきた。情緒面が安定し、前向きに授業に参加したり、集中して話を聞いたりする時間が多く見られるようになった。 ・宿題プリントを自ら進んで担任にもらいにいたり、毎日忘れずに宿題に取り組み、提出したりするなど学習への意識が変わっている。学習に意欲的に取り組めるようになってきた自分自身の頑張りを認めることができ、自信をもつことができるようになってきた。 ・人間関係が広がってきており、自分から関わり話すことができる友達が増えている。教師が仲介に入ったり、友達に書いたことを尋ねられたりすると誰にでも自分の考えを伝えることができるようになってきた。

(児童アンケート)

自分には、よいところがあると思いますか。

児童	5月	9月	1月
A児	ない 理由：なし	どちらかといえばある 理由：なし	ある 理由：わらわせることができる
B児	ある 理由：なし	ある 理由：べんきょうをがんばっているとおもいます。	ある 理由：テストのてんがたかいこと

A児、B児ともに、「自分にはよいところがあると思いますか」のアンケートに1月は肯定的な回答をしている。個に応じた支援により学習に対して前向きに取り組めたり、授業時間に友達と考えを交流したりすることができるようになり、自己肯定感の高まりにもつながったと考えられる。

(2) 情報共有

年度初めはインクルーシブ教育について深く把握できていなかったり、個に応じた支援を意識した授業づくりを行うことが難しかったりしたが、校内研修や研究授業を通して、教職員のインクルーシブ教育への理解を深めることができた。今年度から始めた「インクルタイム」については、91%の教員が「参考になった」と肯定的な回答をしており、児童のニーズの把握や個の支援について考える機会を設けることができた。個に応じた支援を考えた授業づくりにつなげることができたと考えられる。

(教職員アンケート 2月実施)

《自由記述から》

- ・年度当初、自分の困っていることを聞いてもらって一緒に解決方法を考えてもらえたのが気持ち的にもすごく助かった。
- ・自分のクラスの児童への支援方法や現状について話をする中で、クラスを振り返る機会となり、とてもよかった。普段の授業の中でも意識をしているつもりだが、先生方と話をする中で再確認することができた。
- ・ブロック間で話をし、自クラスで改善・実行するという流れで行っていたが、他の先生方の支援の方法なども見たり知ったりすることができればさらによいと思った。

5 研究成果

【学校全体の成果・課題】

○個に応じた支援を考える前段階として、多くの児童が学習に主体的に参加できるような授業にするために学習課題・単元計画を工夫するなどといった全員参加の授業づくりの視点をもつことができた。

○インクルーシブ教育の理念が校内全体に広がり、学習に困り感を抱える児童の背景を探るなど教職員の個に応じた支援への意識が少しずつ高まってきた。情報共有の時間から、教材・教具の工夫、音声読み上げ機能付き教科書の使用、宿題の見直しなど実態に応じた具体的な支援策を話し合い、実践することができるようになってきている。

△高学年は、発達段階やこれまでの経験もあり、合理的配慮を取り入れるためにやや困難さがあった。また、これまで抱えてきた困り感や課題が複雑化しており、効果的な手立てを考えることが難しかった。

△各学年であげた抽出児童について、年間を通じてどのように変容したのか具体的に見取ることができない場合があった。目標となる姿や具体的な評価規準を設定し、定期的に評価や振り返りを行えるように推進していく必要があった。